

序

本発表では、英国との関係で論じられることの多いジェイムズ・ジョイスの *Ulysses* (1922) を、独立前後に特に金銭的な繋がりがあったとされるアメリカとの関係と、アイルランドの自治確立及び独立運動と重なるといわれるインドとの関係を視野に入れて再考した。

1. アメリカとアイルランド、ジョイスの関係

1783 年のアメリカ合衆国の独立は、アイルランド政治にも大きな影響を与えたことは言うまでもない。ブライアン・フォックスが述べるように、1798 年にアイルランドの革命家ウルフ・トーンが「アメリカの模範」について語り、1843 年に政治家ダニエル・オコンネルがアメリカ人は「アメリカ人の自由だけでなくアイルランド人の自由のためにも戦った」と述べたとき、彼らはアイルランドにおける「アメリカ」の概念がいかに反植民地革命と切り離せないものとなっていたかを如実に示している (8)。ジョイスのアイルランド史に対する態度が垣間見えるのは、1907 年にトリエステの大学で行った連続講義の第 1 回目「アイルランド、聖人と賢者の島」においてである。そこでジョイスは、アメリカが成し得た独立運動にアイルランドの可能性をみる——「アイルランド人たちがこれまで、アメリカの同胞たちの行ったことを成し得なかったとしても、それがすなわち、今後もアイルランド人には成し得ないだろう、ということにはならない。」 (264)。さらにジョイスは、「今日、合衆国へ移民したアイルランド人は千六百万人を数えており、裕福で権力を備えた勤勉な入植者集団となっている。あるいはこの点が、アイルランド再起復活の夢が単なる妄想ではないことの、証左ではなからうか？」 (275) とややアイロニカルに指摘しているように、アイリッシュディアスポラがアメリカで成功する一方で、祖国アイルランドは脆弱になっている現状の改革には、彼らアメリカにいる金持ちの移民の存在が重要であると仄めかされてもいる。このジョイスの指摘は、アイルランドとアメリカとの間にある金銭的なつながりを浮かび上がらせる。

R.J.S. アダムスは、アイルランド独立運動を単なる武力闘争ではなく、資金調達の問題から再解釈する。彼の主張は、アイルランドの革命は、武装組織だけでなく民間の資金提供者に支えられていたという点である。革命期のアイルランド議会 (Dáil Éireann) は、1919 年、1920 年、1921 年に戦時公債としてアイルランド国内で国債 (National Loan) を、海外では外債 (External Loans) を発行した。アメリカでの外債による資金調達額は国債をはるかに上回り、その購買者は大半が 1900 年前後にアメリカへ移住したディアスポラ、もしくはアイルランド生まれの親を持つ non-Irish だった。アイルランドとアメリカの両者の資金がアイルランドの独立には欠かせなかったと アダムスは主張する (298)。

こうした歴史的背景を踏まえて *Ulysses* におけるアメリカへの言及に注目すると、第 15 挿話の中に興味深い描写がある。ディクソン医師から「新しい女性的男性」と診断されたブルームが今まさに赤ん坊を産もうとしている場面である。この場面は、ブルームの出産というジェンダーの問題や“womanly man”というオットー・ヴァイニンガーが使用した反ユダヤ主義的発言の問題、ブルームのセクシュアリティの問題として取り上げられることが多いが、本発表で注目したのは、ト書の“(General commotion and compassion. Women faint. A wealthy American makes a street collection for Bloom. Gold and silver coins, blank cheques, banknotes, jewels, treasury bonds, maturing bills of exchange, I. O. U's, wedding rings, watchchains, lockets, necklaces and bracelets are rapidly collected.)” (15.1811-15) において、子供を出産するブルームのための募金が「金持ちのアメリカ人」によってなされている点である。

デ・ヴァレラがアメリカでの資金調達を行った時期 (1920 年 1~10 月) は、ちょうどジョイスが *Ulysses* の第 15 挿話を執筆した時期にも重なっていることから、ジョイスが独立を目指す祖国アイルランドへのアメリカからの資金の流れを認識していたであろうと考慮するならば、次のような読み方が可能になる。つまり、新しい命を生み出すブルームのために金持ちのアメリカ人が金品を集めるという構図が、新しい国家として誕生するアイルランドのためにアメリカで外債が集められたという構図と重なっているという読み方である。実は、この場面の前で、ブルームはレオポルド 1 世として戴冠し、「新しいアイルランドの新しいブルームサレム」を建国している (15.1541-45)。ただ、この理想社会はもろく、結局は多くの批判を浴びるが、これはまるでアイルランド自由国成立後の混乱と英愛条約の是非を巡った内戦を見通しているようなかのようでもある。ジョイスのアメリカに対する態度について、無関心あるいは敵対的と指摘されているが、彼の作品にはアメリカの歴史や文化、政治への関与が示されている。特に二国間の金銭的な繋がりが、*Ulysses* において描写されていると読み解くことで、アメリカを中心とした資金の流れをジョイスがトランスナショナルな視点で眺めていた様子が浮かび上がる。

2. インドとアイルランド、ジョイスの関係

1916年のイースター蜂起は戦時下に帝国の周縁で起きた対帝国闘争の一形態として、インドやエジプトなどの民族運動からも注視された。特にインドは、アイルランド独立運動を身近に感じそれを手本としたとされる。一方でアイルランドの人々は、自分たちを他の植民地と同一視していなかったとされる (Kiberd 259)。そして、British Raj (1858-1947 インド統治) のもと、多くのアイルランド人は British Army や Indian Civil Service を通して帝国行政に参加していたほか、インドで富を築いた「ネイボブ (nabob)」の存在は、アイルランドが帝国による支配を受けるのみならず、その恩恵を受ける側面も有していた実態を示している (堀江 1-5)。

Ulysses でもそうしたインド帝国統治に与するダブリン市民の姿が見られる。例えば、第10挿話、茶商のトム・カーナンが理髪店の姿鏡で自分の全身を確認する場面において、その姿を「紳士」として見なす際に「帰還したインド駐留軍将校」を引き合いに出す——“Mr Kernan glanced in farewell at his image. High colour, of course. Grizzled moustache. Returned Indian officer. Bravely he bore his stumpy body forward on spatted feet, squaring his shoulders.” (10.755-57)。一方語り手は、カーナンを好意的ではない表現でやや滑稽に描いていることから (Dick 152)、ジョイスは、英国の植民地でありながら同時にその一部へと同化している人々を単に描き出すのではなく、カーナンが目にとめる姿鏡が示唆するように、その描写を通して彼らに現実を見抜く視点を促そうとしていると言える。

Ulysses の舞台はアイルランドのダブリンだが、最終話第 18 挿話のモリーの独白においてジブラルタルが語られる点は特に重要であろう。作品の枠組みとして用いているホメロスの『オデュッセイア』は、地中海世界を航海空間としているが、ジョイスはそこにジブラルタルという地中海ひいてはオリエントへとつながる入口であり、大西洋と地中海を結ぶ要衝を追加していると読み取ることができるからだ。ジブラルタルは大英帝国の地中海の要塞で植民地と帝国の境界とされる。モリーの記憶の中でダブリンとジブラルタルが混在するとき、我々読者は、英国とアイルランドの支配—被支配関係から脱ヨーロッパ・脱帝国そして東方へと誘われていると言える。

注目すべきは、ジブラルタルでのモリーの初恋の相手であるマルヴィが英国海軍中尉であって、モリーと別れて向かった先がインドである点だ。アイルランド人と示唆されるマルヴィは、まさに British Raj のもとで British Army を通して帝国行政に参加した人物として描かれている。加えてモリーは、「彼のような人たちはどうせ溺れるか砲弾で吹き飛ばされるかする」 (18.855-56) のだと、帝国拡張の陰で失われる若者の命を思い起こす。英国、アイルランド、インドの繋がりとその関係性の裏で払われる代償を彷彿させるマルヴィという人物が造形されているのも、*Ulysses* のトランスナショナルな視座と言えよう。

Ulysses におけるインドの描写は、単にアイルランドの帝国拡大への歴史的な関与や、ジョイスのオリエンタリズムへの思考を映し出しているというだけではない。むしろ、ジョイスが英国—アイルランド関係を二国間の問題ではなく、インド植民地支配を含めた関係性の中でヨーロッパの国際秩序の変容をも見据えていたその証左であり、さらに踏み込むのであれば、ジョイスは、アイルランド国内ではインドなどの他の植民地の問題をわきに置き、自国の「ヨーロッパ化」へと突き進む動きに対して鋭い視線を向けていたとも言える。

結び

Ulysses 第 15 挿話で出てきた金持ちのアメリカ人および第 18 挿話で言及されるインドへ向かったマルヴィ、それぞれブルームの幻覚とモリーの記憶の中の存在である。重要なのは、ブルームもその妻モリーもアイルランド外にルーツを持つ人物として設定されている点だ。二人は、西洋世界の内部に位置しつつも周縁におかれているアイルランドダブリンの中で、さらに他者化の対象にもなっている。しかしだからこそ、ブルームとモリーは西洋の外の世界へと意識を向けることができるのであって、それはジョイスが *Ulysses* を、1904 年以降に顕著になる帝国の変容と覇権の移動、そしてグローバル化を見据えた作品として描こうとしていたと言っても良いのかもしれない。その小さな示唆を、我々読者が気付いてこそ、西洋の中心で周縁のアイルランド人としてもがいた作家ジョイスの「アフター西洋」へのまなざしを受け止められるのではないだろうか。

引用文献

Adams, R. J. C. *Shadow of a Taxman: Who Funded the Irish Revolution?* Oxford UP, 2022.

Dick, Susan. “Tom Kernan and the Retrospective Arrangement.” *James Joyce Quarterly*, vol. 18, no. 2, winter 1981, pp. 147-59.

Fox, Brian. *James Joyce's America*. Oxford UP, 2019.

Joyce, James. *Ulysses*. Edited by Hans Walter Gabler et al., Vintage Books, 1986.

Kiberd, Declan. *Inventing Ireland: The Literature of the Modern Nation*. Harvard UP, 1995.

ジェイムズ・ジョイス. 『ジェイムズ・ジョイス全評論』吉川信訳, 筑摩書房, 2012 年.

堀江洋文. 「インド・アイルランド関係と大英帝国」『専修大学社会科学研究所月報』第 614 号, 2014 年 8 月, 1-34 頁.